



たんぽぽ

戸田市立喜沢小学校

令和7年10月31日 11月号

【学校教育目標】

「夢と希望をもち、
よりよい社会づくりに向け
行動する児童の育成」

子供を被害者にも加害者にもしないために

校長 加藤 貴嗣

明日の音楽会に向けて、子供たちは大きな声で歌うだけでなく、自然で無理のない、響きのある歌い方で歌うこと、声を合わせて歌うことを学んでいます。音楽会の後には、「声を合わせて歌えてよかった」「音のあった演奏がよかった」「響きのある歌声がきれいだった」などと声かけいただけますと、子供たちの達成感もより高まることと思います。子供たちの練習の成果、心をつなげた笑顔あふれる様子をお楽しみください。

さて、11月は「戸田市いじめ撲滅強調月間」です。今月は「いじめ」をなくすために、学校、家庭、地域の協力についてお伝えしたいと思います。

絵本「いじめ、みちゃった」(和久田学 作 世界文化社)に、作者の和久田さんのグループが日本人の20～34歳、4千人に調査した結果として、約半数がいじめ被害を経験し、そうした被害が引きこもりリスクを高めることや、欧米の研究ではいじめた加害者にも、その後の人生に悪影響を及ぼすリスクが増すことなどが紹介されています。

「いじめの加害者にも未来がある」と耳にすることがありますが、これは「子供は過ちから学び、立ち直る力をもっている」という教育的な考えに基づくものです。しかし、その使われ方によっては、加害者の責任をあいまいにし、被害を受けた子供の心の痛みを軽く扱ってしまう可能性があります。

いじめは、どんな理由があっても許されない行為です。加害の側に立った子供には、自分の行為がもたらした相手の苦しみを理解し、心から反省し相手に償う責任があります。その責任を果たすことを避けたまま、「未来があるから」と言ってしまうと、それは言いわけにしかありません。

一方で、責任をしっかりと受け止め、向き合った子供には、もう一度やり直すチャンスがあることも大切です。それが、社会の中で生きていく力を育てることにつながります。

つまり、大切なのは、「加害者にも未来がある」ではなく、「責任を果たしたうえで、未来を築くことができる」という姿勢です。

学校では、被害を受けた子供の心のケアを最優先にしながら、加害の側の子供にも、責任を自覚し、行動を改めるための指導を続けていきます。

上述の本には、「いじめ」をなくすための方法として「トリプル・チェンジ」という取組が紹介されています。

①考え方を变える<シンキング・エラーを正す>

「失敗したから」「悪いことをしたから」「自分と違うから」などの理由で「人を傷つけてもいい」と思ってしまうのがシンキング・エラーです。まず、これが誤った考えだということを伝えましょう。

②行動を变える<「や・は・た」行動をとる>

「や」＝「やめて」と最初に言えれば、いじめが深刻化しづらくなります。本人または周囲の人が危険にならない範囲で「やめて」と言うよう伝えましょう。

「は」＝「はなれる」は、いじめを最も早く終わらせる方法です。加害者に立ち向かう必要もなく、互いに冷静になることができます。「はなれる」のが難しい場合は、「た」の行動を促しましょう。

「た」＝「たすけて」と言えるスキルは誰もが身に付けなければならないものです。助けをもとめることは卑怯なことではなく、勇気ある行動なのだと伝えましょう。

③集団を变える<全員にとって居心地のよい集団を考える>

「いじめが起りにくい」集団になるかどうかは、その集団の子供たちや近くにいる大人のふるまいだけでなく、保護者からの働きかけも影響します。誰もが「いじめなんていやだ」と思っていること、人の気持ちに共感することの大切さ、特に「誰かのつらい気持ち」を見過ごしてはならないことについて、さまざまな機会伝えていきましょう。学校で日頃指導していることと同様の内容です。だからこそ、学校と家庭、地域で協力して子供に伝えていくことが、「いじめ撲滅」に大きな力となると考えます。私たち大人が力を合わせて「いじめ」をしない子供を育てるために、皆さまのご理解とご協力をお願いいたします。